

本を選ぶ

NO.398 2018年(平成30年)7月20日

●発行／ライブラリー・アド・サービス

<http://www.las2005.com>

本社 〒335-0004 埼玉県蕨市中央 5-20-1 TEL=048-432-3726

- <くろん・ぼわん>普通
- 紙魚の繰り言 第20回
- ワークショップは、何でも解決できる万能なツールではない
- 恩師の想いを絆つないだ本を創る
- 帰ってきた図書館員 (55)

●●●●●くろん・ぼわん●●●●●

普通

近所で木造住宅工事が始まった。元の古い建物を解体撤去してから、敷地を整地し、基礎のコンクリート打設にかかる。従来なら基礎工事から柱と屋根の下地が立つまでで一区切りのはずだが、棟が上がっても昔の風習には倣わず、どうやら上棟式をやらないようだ。そう言えば建築の現場で神主さんをあまり見かけなくなった。

棟上げの日に搬入された柱には、番付もバーコードも印字されている。機械加工で細工された部材のすべてが電子管理されているらしい。かつては水準器を使って水平・垂直を測っていたがレーザー水準器に替わり、トントンと釘を叩くげんのう玄翁の音は空気圧を使ったエア工具のパチンパチンという機械音に替わった。手書きの図面も青焼きもなくなった。

そんな折り、ふと手にした本が面白い。『あるノルウェーの大工の日記』(オーレ・トシュテンセン著／牧尾晴喜監訳)。ノルウェーの大工さんが書いた日記が本国でベストセラーだという。

建てる側がこんな家を建てたという体験記だとか指南書めいた本はあっても、町の大工が書いた本の類書がないだけに新鮮だ。施主との間で展開する生真面目かつ駆け引きめいた受注作戦には、

施工を請け負う側の悲哀も発注側の心理も垣間見える。結局かちとった工事は屋根裏の大幅改築工事。あちこちに「方杖や繋ぎ小梁などの余計な構造物を外した分、古い垂木の煉瓦壁と接する箇所を補強しなければならない」などという専門的な記述がはさまっているが、一般読者に通じるかどうかは眼中になさそうだ。あえて残してあるのは、編集者のアドバイスだろうか。また日本語訳の監訳者による訳注も必要最低限度にとどめ、専門的な領域はあまり気にせず読んでほしいというスタンスだ。

日本では、名だたる宮大工の棟梁が書いた本が長く読み継がれ、大規模な歴史的建造物と伝統を語り、弟子の育成や技術の維持継承、さらに良質な建築材を確保しておくための造林にも心を砕く様子を伝える。文化を語っているのだ。こうした本を読んで宮大工を志す人もいだろう。

オーレ・トシュテンセンの場合は、現代の一般市民の住宅建築を生業とする普通の大工で、独立した零細事業者でもある。結局彼が綴っているのは、自分が出会う人々の暮らしそのもの。誠実かつ堅実で良心的に進める建築工事の日々を語り、施主との交流、職場(つまりは現場)の人間模様を淡々と書き記す。そこに時折混じるユーモアからは、著者の人間性がふわりと伝わってくる。「私には自分の培った経験がある。他人から学ぶのは大切だが、経験は私個人のものであり、もはや私の人格の一部でもある」。自らの職業領域に誇りをもった普通の人の矜持がここにある。(埜村 太郎)

ネコの食べ方

ネコによっても、食べ方はそれぞれなのでしょうが、我が家の母ネコのシロと息子のチビはドライタイプ（固形）のえさを食べる時に、十分に噛まないで、まるで、飲み込むように食べることがあります。その結果、何が起きるのかというと、吐き戻しです。食べたえさを消化しないまま、吐き戻すわけです。いつもそうなのかと見ていると、普段は噛み砕いてはいるし、飲み込んで消化してはいるように思います。

ただし、肉食が基本の動物は固形のえさをつぶそうとしても、歯が牙なので、そもそもうまく噛み砕くことはできないのだらうと思います。犬だって、そうです。そもそも歯は噛み砕くというより、噛みちぎるためのものなのでしょう。

吐き戻すところを見ていないで、初めてその物を目にした時には、糞なのかと思いましたが、よく見ると、えさの形がそのまま残っています。そこで、食後の様子に注意していると、吐き戻しているのだと気付きました。ネコは体を盛んになめるので、そのために毛玉を吐き出すこともあるようですが、毛玉がまじっているようには見えませんでした。いずれにしろ、吐き出した後、特に具合は悪くはなっていません。吐き戻し対策用のえさも売っていますので、それほど、珍しいことではないのでしょう。ひょっとすると、ネコが食べたものをそのままの形で吐き出すことも、大食いネコの昔話が誕生する要因になったのかもしれない。

なぜお腹から出てくるのか

さて、前々回、少し説明の足りないところがありました。一つは大食いネコの話で、ネコに飲み込まれた人たちが最後に、口からではなく、お腹から出てくる。これは出産を表しているのではないかと指摘しました。が、牽強付会と言われるかもしれません。しかし、入ったところから出てく

る方が話としては素直で、それがわざわざお腹から出てくる話になるのは、何か理由があると考えるべきではないでしょうか。

たとえば、田島征彦の『じごくのそうべえ』（童心社、1978 つまり、落語の「地獄八景亡者戯（じごくぼっけいもうじゃのたわむれ）」）では、鬼の口と尻の穴からそうべえたちは出てきます。入ったのが口からで、尻の穴というのは、一般的に出るところですから、まあ順当でしょう。

飲み込まれたものがお腹から生きて出てくるという話は、グリムにもあります。「オオカミと七ひきのこやぎ」と「赤ずきん」です。ただ、「赤ずきん」の飲み込まれた赤ずきんとおばあさんが助け出される部分はグリムの創作という指摘があります。グリムが参照したフランスの昔話のペローには出てきません。（詳しくは、アラン・ダンダス編『「赤ずきん」の秘密—民俗学的アプローチ』紀伊國屋書店／1994 等を参照のこと）

そこで、「オオカミと七ひきのこやぎ」の最後で、ぐっすりと眠っていたオオカミは、腹をハサミで切られ、助けられた子ヤギたちのかわりに石を詰められて、その重みで井戸に落ちて死んでしまうという結末で考えてみます。

『絵本の深層心理学』（平凡社／2004）の中で、矢吹省司はこの場面は出産の擬態であると述べています。男性には決してできない出産という行為を疑似的に経験し、決して産むことのできない空しさを解消するためだということです。擬態というのはちょっと強引ではないかと思いますが、出産を意味しているのはそのとおりではないでしょうか。

出産というのは、新たな命の誕生であり、新しい命の獲得です。つまり、これは死と再生の物語なのです。ネコによってお腹の中の暗闇に飲み込まれ、再び生まれることにより、新たな力を宿して、よみがえるのです。

そこで、思い起こすのは、2016年に、尾野真千子、

江口洋介、横山歩主演でテレビドラマになった「はじめまして、愛してます。」です。特別養子縁組で結ばれた母子が出産ごっこをとおして、互いの関係を確かなものにしていくというエピソードが語られていました。まさに、死と再生の物語ではないでしょうか。

それが神話的な世界では、『はらぺこねこ』のように、月と太陽が飲み込まれた後、お腹を通して月と太陽が再び復活する。それは月のみちかけであり、冬から春への季節の変化を意味しています。やがて、再び死によってリセットされ、その後再生するという循環がもたらされます。その果てしない循環は、人間一人一人にとっては、永遠とも感じられる長い時間です。

大食いネコに飲み込まれて、お腹から出てくる多くの話は、命の再生の物語ではないのでしょうか？

ただし、大食いネコ系列の絵本すべてがそうというわけではありません。ハアコン・ビョルクリット作『はらぺこガズラー』（ほるぶ出版／1978）では、ネコのガズラーは月までは飲み込むのですが、太陽は飲み込めず、太陽の熱（？）で破裂してしまうのでした。これでは、出産というイメージは描くことはできません。

「オオカミと七ひきのこやぎ」ではどうでしょうか？ 矢吹省司は前掲書の中で、オオカミのお腹から生還した6匹の子ヤギたちが元気にオオカミに対する復讐に参加している（自分たちの代わりに石を集めている）のは、つまり、飲み込まれて生還することによって元気になるのは、心の成長過程（過去の未熟な人格が死んでレベルアップしてよみがえる過程）を象徴的に物語っているのだと、指摘しています。

子どもの本の類話

ところで、前回取り上げた『どろにんぎょう』の類話が、まだありました。ミラ・ギンズバーグ文、ジョス・A. スミス絵『ねんどぼうや』（徳間書店／2003 原題：CLAY BOY）、宮川やすえ再話、井

上洋介絵『きんのつものしか』（復刊ドットコム／2017 ロバールスカ地方（ソビエト）の民話）、シンシア・ジェイムソン再話、アーノルド・ローベル絵『まるごと ごくり!』（大日本図書／2016 原題：THE CLAY POT BOY）と見つかりました。特に、井上洋介さんは『きんのつものしか』と『どろにんぎょう』とほとんど同じ話を2回描いています。

いずれも元はロシアの昔話のようで、最後のどろにんぎょうのおなかを突き破るのは『どろにんぎょう』（これは北欧民話）ではトナカイ、『きんのつものしか』ではシカで、『ねんどぼうや』ではヤギと動物の種類が違うのですが、それぞれその功績をたたえて、角を金色に塗ってもらうというところは共通しています。『ねんどぼうや』の前書きでギンズバーグは類話は世界各国に伝わっていると記しています。

実際、他にも、「おそろしいクラトコ」（バージニア・ハビランド文『森の精』心のこる世界のむかし話 3 チェコ・スロバキア、学校図書／1994）では大食いなのはニワトリで、ニワトリのえぶくろを食い破って出てくるのがネコの役回りになっています。

また、西アフリカの昔話『おおぐいひょうたん』（吉沢葉子再話、斎藤隆夫絵、福音館書店／2005 『こどものとも』1999年1月号）では、なんとひょうたんが大食いの主です。その大食いのひょうたんをやっつけるのが、ヤギです。ヤギはおとなしい動物という印象がありますが、昔話の世界ではそうでもないようです。

この他にも、飲み込まれて生還する話としては、旧約聖書のヨナ書の、魚に飲み込まれたヨナの話、コッローディの『ピノッキオの冒険』があります。日本の昔話では、平野直再話、太田大八画『やまなしもぎ』（福音館書店／1977）の中で、二人の兄が沼の主になり飲み込まれ、一番下の弟に助けられます。お腹から出てきた時、二人はあおい顔をして出てきたとされています。明らかに、これも死と再生の物語なのです。（さかべ たけし）

ワークショップは、何でも解決できる万能なツールではない

—『ワークショップをとらえなおす』—

松本 功

教師が教壇から、生徒に向かって決められた教授内容を一方向に教えるという方法について、批判が行われてもうすでに久しいです。授業に参加する人々が受け身に内容を学ぶのではなく、一方的に教わるのではなく、主体的に多様な方向で学び合うことが重要とされ、一方向的な教室の学びに対するものとして提唱され、実践されてきた学習方法がワークショップです。ワークショップと呼ぶことのできる活動は、ずいぶん前から行われていたのですが、中野民夫氏の『ワークショップ』が2001年に刊行されたことで、ワークショップということばが一気に認識され世の中に広まりはじめました。ワークショップという学びのあり方が、現在ではだいぶ普及しているといっているでしょう。その時から、20年近くたっている現在に、一度振り返り捉え直してみようということが本書の目的です。

ワークショップは、大学の授業やアトプロジェクトの場であったり、住民が参加するまち作りの話し合いであったり、企業内での研修であったりと今やあちこちで使われています。アクティブラーニングや反転学習も、ワークショップ的な授業の実践と考えられていると思います。功罪もあります。ワークショップの運用のノウハウが蓄積されて共有化されてきていますが、結果、その場その場での現場に基づいて、自由な発想から生まれるはずのコミュニケーションが、ルーティン化してしまっていることがあります。著者が例としてあげているのは、アイスブレイクです。人々が集まって、これから何かをしようという時に、緊張を解きほぐすためにアイスブレイクを行いますが、アイスブレイクをやるのが定形化してしまい、緊張を解きほぐすことが必要ではない場合にも行うということがあります。その場にいる人々の関係性をみようとししないでやると決まっている

からやるということは、ワークショップが定形化していることだと指摘します。これはアイスブレイクにかぎりません。ノウハウが現場の文脈を無視して、一人歩きするということです。

一方向に教えるというものではなく、様々な多様な声を聞くという装いをしているがゆえに押しつけではないように見えます。現場現場でオーダーメイドで作るはずですから、既製品ではないはずですが、自由に見えますが、既製品なのです。自由に振る舞っているように見えるのに、実は定形化されています。定形化しているということを実感できないことさえあります。一方向に教えるものであれば批判しやすいですが、自由に振る舞っているように見える定形は批判的に捉えにくいのです。

そのような現状について、著者は、ワークショップのそもそものあり方に立ち返るとともに、ワークショップ自体がメディアであることを自覚するよう指摘します。著者が、行っているワークショップの3つのかたちについて自身の経験を踏まえて、振り返ります。移動して学ぶ場所を作っていく「キャンプ」、語り手と語るテーマをランダムにして、話しをする場所を捉え直す「自画持参」、まちに出て、まちに関わることばを作り出していこうとする「まち観帖」です。それぞれの中に成功あり、失敗あり、自己批判あり、その都度その都度考えていくプロセスが見えることが面白いです。完成した既製品ではなく、手作りの感覚。また、学生を連れて、学びが起こるように工夫している著者の試行錯誤するあり方も興味深いです。

本書自体が、自身の活動の振り返りになっていて、振り返る発想をライブとして体験できるものになっています。読者は著者とともに、振り返るワークショップに参加していることを感じるができるでしょう。(まつもと いさお：ひつじ書房)



『ワークショップをとらえなおす』／加藤文俊著／四六判／並製本／208頁／定価：本体1800円（税別）
ひつじ書房／2018年6月刊

恩師の想いを^{つな}絆いだ本を創る

—『ごみ収集という仕事』—

大江 正章

ぼくは1970年代後半の大学生時代、ロクに授業に出ない不真面目な学生だったが、ゼミだけは熱心に参加した。その先生の授業や自治体労働者に寄り添って生きる姿勢に、感銘を受けたからだ。1年生のときから研究室に出入りし、4年生や5年生のときは生意気にもゼミ生の選考にも口を出した。それを彼はあっさり受け入れたのだから、驚いてしまう。

恩師の名前は寄本勝美。残念ながら2011年に70歳で亡くなった。専門は自治行政・環境政策で、一般にはごみ問題の専門家として知られている。自ら清掃車に乗ってごみ収集を体験し、清掃という仕事の意義を訴えた。多くの著書があり、とくに『ごみとリサイクル』（岩波新書）はロングセラーで、このジャンルの白眉と言える。ぼくにとっては、会社の株主でもあり、仲人でもある、生涯の恩師だ。彼が家族と一緒に米国へ留学したときは、ただで家に住ませていただいた。それから30年弱、お会いしなかった年は一度もない。

いまでこそ、ごみの分別・減量やリサイクルは社会的に大きなテーマである。だが、当時はいわゆる「東京ごみ戦争」（杉並区民による清掃工場建設反対運動と、ごみを焼却・埋め立てしていた江東区による杉並区のごみの持ち込み阻止）が話題になったものの、ごみ問題に関心を持つ学生などほとんどいない。寄本ゼミはよく「ごみゼミ」と揶揄されたけれど、ぼくたちはごみ問題について学ぶことを誇りに思っていた。

卒業後ぼくはたまたま、地方自治を多く手掛ける出版社に勤める。そこでは、恩師の本を編集するという素晴らしい縁にも恵まれた。『自治の現場と「参加」——住民協働の地方自治』（学陽書房、1989年）だ。タイトルは地方自治の一般書だが、ほぼごみ問題を扱っている。

それから30年目の2018年に、ぼくは『ごみ収集という仕事——清掃車に乗って考えた地方自治』（藤井誠一著、コモンズ）を編集・出版した。恩師と

同じく、清掃労働の体験（東京都新宿区）に基づく本である。旧知の自治体労働組合幹部に著者を紹介され、その熱意にあふれた話を聞き、清掃労働者への深い愛を感じて、「この人の原稿は、ぼくが本にしなければならぬ」と強く思った。また、この30年で清掃部門の民間委託が大幅に進んだ。経費は節減される一方で、業務はブラックボックス化し、住民への細やかな配慮は失われ、労働条件は大幅に悪化した。だから、そうした現状を踏まえた新たな本が必要なのである。

もっとも、本づくりは難航した。彼はすでに報告書をまとめていたのだが、文章はうまくない。気持ちが独り歩きしている。しかも原稿は長く、繰り返しが多く、構成も平凡だ。そこで、目次案を練り直し、大幅に削除する一方で加筆も求めたうえで、編集者として必要なリライトを行った。他の本に比べて相当に時間がかかっている。それでも、編集作業をしながら、恩師の顔や言葉が甦り、不思議な喜びの感情が湧き上がってきた。もちろん、売れる本ではない。でも、世に問うに値する内容になったと自負している。以下が帯のキャッチコピーだ。

「清掃という仕事の奥深さ、日があたらぬ場所で真摯に働く職員の姿、歌舞伎町や新宿二丁目のごみ事情、民間委託の問題点、そして本来の地方自治のあり方について論じる」

ところが刊行後、まったく想定していない事態が起きる。まず、配本直後から客注が毎日数冊あった。そして、配本10日後の220冊をはじめTRC（図書館）からの大量注文が計3回。書評も1カ月以内にAERAと毎日新聞に掲載され、あっという間に重版！

著者の真摯な姿勢が評価されたのだろう。編集者・出版者として、本当にうれしかった。

ちなみに、この本の奥付表示も、小社創設を仲間が祝ってくれた日も、5月30日。「ごみゼロの日」である。（おおえ ただあき：コモンズ）

帰ってきた図書館員 (55)

—かこさとしさんの原動力—

山下 青葉

絵本作家のかこさとし氏が5月2日に亡くなった。92歳だったとのこと。

ご長寿であったといえると思うが、いつまでもお元気で作品を書き続けていただけるような気がしていたので残念でならない。

たくさん作品を遺してくれたかこさん

私の勤務している図書館では、早速著書の展示コーナーが設けられ、「ありがとう」との言葉と共にたくさん著作が置かれた。絵本を中心に貸出が多く、予約が入るものも相次いだ。改めてかこ氏の作品が愛されていたことを感じたのであった。

同様なことは全国の図書館であったようで、新聞の報道やテレビのニュースなどでその模様を伝えているのを目にした。

5年前に『からのパンやさん』（偕成社／1973年）の続編が4冊出版された時に、この欄で当時87歳であったかこ氏が40年ぶりに続編を書かれたということに感動した旨の文章を書いたのだが、今回も1月に『だるまちゃんとかまどんちゃん』『だるまちゃんとキジムナちゃん』『だるまちゃんとはやちちゃん』（いずれも福音館書店）とだるまちゃんシリーズの最新刊を3冊も出版されており、90歳をこえてのその創作意欲に改めて感動したものだ。ましてやそれから半年も立たずに亡くなれるとは思いません。

かこさんの、絵本に込めた思い

今回これを機会にというわけでもないのだが以前から気になっていた『未来のだるまちゃんへ』（文藝春秋／2014年）を読んだ。

この作品は、かこ氏の自伝のようなかたちを取りつつ、絵本に込めた希望や子ども達への思いを語っているものである。以前からかこ氏が子ども達にひとかたならぬ愛情を抱いていることを作品やインタビュー記事等で感じていたのだが、今回読んで、大学生で敗戦を迎え、それまで戦争を賛

美していた大人達がコロッと態度を変えて「一億総懺悔」だの「初めから戦争には反対だった」などと言い出すのを目の当たりにして大人への不信感を募らせていたところに、演劇や紙芝居、就職後はセツルメント（社会奉仕活動）の子ども会への関わりの中で、大人達と対照的に正直で柔軟で伸びやかな子ども達の姿にふれ、この子ども達に「生きることをうんと喜んでほしい」と思ったことがその源であるのがわかった。

この本を、何故絵本を書くに至ったかについて今まで不十分な説明しかできなかったのも、それにきちんと答えるという目的で書いたということがあとがきに書かれていたのだが、それはやはりその愛情を表現するための手段が、かこ氏が描かれた数々の作品であったということであろう。

もう新しい作品に出会えないことは寂しい限りであるが、心からご冥福をお祈りしたい。

司書の仕事を小説で…

職場に国立国会図書館のメールマガジン「カレントアウェアネス」が送られてくる。

館種を問わず、国内外の図書館及び図書館学に関する情報が網羅されているので、正直何のことを言っているのかさっぱり理解できない記事もあるのだが、興味深い記事が多く、愛読している。

先日送られてきたNo.348の中に「司書の仕事を小説で紹介」というものがあった。

この4月に刊行された『司書のお仕事 お探しの本は何ですか?〜』（大橋崇行著／勉誠出版）について、書かれないきさつ、出版に至るまでの経緯等を、著者の大橋氏、監修者の愛知県犬山市立図書館司書の小曾川真貴氏、出版元の勉誠出版で編集を担当された萩野強氏に国立国会図書館の関西館の方がインタビューした記事である。

これはと思ひ所蔵を確認したところ、すでに購入されていたので早速読んでみた。

主人公の稲嶺双葉は4月に味岡市立図書館に採用

された新人の司書で、彼女が2人の先輩司書に助けられながら、蔵書目録の作成、本の受け入れ作業、イベント企画などの仕事を通して司書として成長していく姿が描かれている小説である。

著者の大橋氏は、東海学園大学人文学部で教鞭を取られているのであるが、司書課程を履修している学生やオープンキャンパスで資格関連の質問に来る高校生が、なかなか司書の仕事をイメージできないことがわかり、一冊で大体のイメージが掴める本がほしいと思い、この本を書かれたとのことである。

現役の市立図書館司書の方が監修されていることもあり、カウンターは図書館運営会社の職員に委託されていることになっているとか、選書会議でBL（ボーイズラブ）本のことが取り上げられているなど、同じテーマを取り扱った本にはない視点があったのがよかった。

しかしながら私は、これを読んだ大半の学生は、正規の司書ではなく、図書館運営会社の職員の方になってしまうのが現状ではないかと思ってしまったのであった。

（やました あおば：図書館員）